

A-2 研究会「医療看護とスピリチュアリティそして日本的“思いやり”倫理」

稲垣久和

昨年度の小西達也、伊藤高章氏、谷山洋三氏の発題があった。今年度は特に日本的“思いやり倫理”に入る。ただし“思いやり倫理”という言葉も対人援助の場面では問題ないが、それが公共圏で使用されるときに“責任”概念とともに提示される倫理学になっていなければならない。注意すべき点として和辻倫理学と公共性について、和辻倫理学の宗教性についてまとめておく。

- ① 和辻倫理学の「間柄」は彼の使用する「公共性」と深く関係している。ただし全体の叙述に見られるのは和辻倫理学における「公共」は「公（おおやけ）」と同義であり、最大の公は国家（であり天皇への奉仕！）である。和辻は西洋近代の個人主義と市民社会には一貫して反対であり、従ってそこでの公共の強調は「全体」の重視、滅私奉公（上巻 621 頁）に傾きやすい。筆者の公共哲学的視点から言えば「他者性」への考慮が弱いということである。家、地縁的近隣、村、国という形での親密圏的重層構造がそのまま公共圏として捉えられている。しかしそうではあるがここに隣人的共同存在としての“助け合い”“相互扶助”の“日本的思いやり”倫理の伝統を生かすには「親密圏」に限定した方がよさそうだ。
- ② 経済的組織の超地域性は「経済人」（ホモ・エコノミクス）の抽象性のうちにその根拠を求むべきものではなく、実は超地域的な文化的共同体への動向にほかならなかったのである。近世初頭以来のヨーロッパ人の海外貿易は、常にキリスト教の伝道と並行して行われた。伝道者の主観的意図が何であったにせよ、また貿易商人のキリスト教利用がいかなる程度に行なわれたのもせよ、世界経済形成の一步一步にキリスト教の愛の旗印が伴って動いていたという事実は否定することができない。そうして世界経済が明白な形に形成せられるよりも前に、すでにヨーロッパの文化が世界全体に広まっていたということも、明らかな事実である。世界経済がいかに利己主義の原理によって説明されようとも、もし利己主義の立場のみが露骨に現われていたならば、恐らく世界経済は形成され得なかったであろう（上巻、519 頁）。

和辻は「キリスト教の愛の旗印」を語りながらも、抽象的な思索の段階に留まり、その宗教的内容を深めることをしない。近代資本主義が及ぼした貧しい者の経済的困窮など、その負の側面の具体性に触れようとしなかった。同様に和辻の仏教理解も文化史的な視点のみからなされているとの批判がある。「その理由を梅原猛は、和辻の「間柄」の倫理学が仏教を理解するだけの広がりをもたなかった点に求めている。つまり自我と集団

との「一種の予定調和」を基礎に置く和辻の間柄的人格主義では、仏教が問題にした人間の死や罪、それを前にしての「魂の痛切な悶えや叫び」、あるいは「永遠不滅な生命への凝視」を捉えきれなかったことを梅原は指摘している。その指摘を踏まえて湯浅泰雄も、「和辻哲郎の日本思想史研究の方法」のなかで、和辻における「宗教的関心の欠如」を指摘している」。(藤田正勝「日本的なるものへの問い」[岩波講座『日本の思想』第一巻、2013年、192頁])